検体は新梢のなるべく中間の葉をとり，その葉の中央部，主脈と葉縁の中間の部分を用いた。ヤブツバキは三河地方，京都，亀岡，氷見市附近のものを，ユキツバキは新潟，富山，岐阜県山地自生のものを用いた。ヤブツバキの変種リンゴツバキ，園芸品種としては熊谷，カクレミノ，西王母，加茂本阿弥，金魚椿など少数の個体ではあるが何れも下皮を欠いている。またツバキと近縁なサザンカ，ユチャ，起源の明らかでないワビスケなども下皮を欠いている。ただし，上記園芸品種のうち熊谷，カクレミノはヤブツバキと同様にさく状組織は 2 層，西王母，加茂本阿弥，金魚椿，ワビスケは 3 層である。また野生のユキツバキ中間型のものには 1 層の下皮，2 層のさく状組織があることとユキツバキと全く同じ型のものと，栽培品ユキツバキ中間型のものには下皮を欠き 3 層のさく状組織をもっているもの，即ち上記園芸品種のうち西王母，加茂本阿弥などと同じ型のものとがある。上記記載を一括表記する(表 1)。トウツバキ，ホンコンツバキ，サルウインツバキ，ウラクツバキその他の園芸品種については次回にゆずる。

実験材料あるいは文献を寄与された津山尚教授，萩屋薫教授，鈴鹿紀博士，桐野秋豊氏その他の方々，また実験に協力された西原潤哲嬢に感謝の意を表します。

*　　*　　*　　*

Camellia rusticana HONDA has hypodermis on the upper side of the leaves, on the other hand *C. sasanqua* THUNB., *C. oleifera* ABEL, *C. japonica* L. and its forms have no hypodermis.

□Hutchinson, J.: **The Genera of Flowering Plants. Dicotyledones, vol. 1.** pp. 516, (1964). Oxford Univ. Press, £6.6.　本書は著者の Families of Flowering Plants ed. 2 (1959) の体系にそって原始的な群とみなす Magnoliales から始めて Annonales, Laurales, Dilleniales, Coriariales, Rosales, Leguminales までの属を簡潔に解説したものである。本最については既にいくつかの紹介があり，それらの中では Taxon-**14**: 166–168 (1965) が親切である。一般的な批評はそれにゆずり，ここでは第一巻にみられるいくつかの末梢的な欠点を挙げておくが，分類学・系統学にとっては重要な著書であり，今後の研究の発展のためにはぜひ座右に備えておきたいものの 1 つである。本書には勿論多くの新見解が盛り込まれているが，全体的に基づく資料がやや古いこと，アジアの資料があまり使われていないこと，また，属の区分がかなり人為的である部分が多く，著者のいう系統学の原理が反映されていないことは，今後の研究に待たねばならぬ点が多いという現状ではあるが，残念なことである。さらに *Phaseolus*, *Vigna*, *Azukia* の関係がひどく混乱しており，449 頁では *Amphicarpa* を保留名として採用していること，479 頁の *Codariocalyx* の基準種等の細い点で，明らかな間違いが比較的多いことも気になるところである。　(大橋広好)